人間は自分で意味を作っていくことで育っていく生き物

初瀬基樹

先日、北九州で開かれた「こども環境学会」に参加し、汐見稔幸先生のお話を聴く機会がありました。
今、日本の教育は大きく変わろうとしています。これからの子どもたちは「主体的、対話的で、深い学び」が求められるわけですが、子どもたちが主体的に学んでいくためには、やはり「遊び」が大事なんだと再確認しました。

（汐見先生のお話から…）

仮に「環境」を「何かしら固有の情報を持った“もの”や“こと”」と定義するなら、「まわりのすべてのものが環境」と考えられます。
さらに、そうした環境（“もの”や“こと”）には、「語義」と「意味」（meaning とsence）があります。

社会的に作られた意味（誰にでも通じる意味）を「語義（Meaning）」といいます。
また、それに対して、
自分で作った意味（私にとっての意味）を「意味（感覚sence）」といいます。

たとえば、「お母さん」の語義は、一般的に誰にでも通じる意味としては「赤ちゃんを産み、育てる女性」ということになります。それに対して「あなたにとってのお母さんは？」と尋ねられたらどうでしょうか？
ある人によっては、「友達みたいに何でも話せる存在」であったり、「限りない愛情を注いでくれた“愛そのもの”」であったり、あるいは、虐待されて育ったケースなどでは「憎しみ」でしかないということもあるかもしれません。このように、人によって“自分にとってのお母さん”の意味は異なってきます。

このように、環境には、それぞれ「語義」と「意味」があるのですが、この「語義（社会的に作られた意味）」を何の疑いもなく取り入れる子が一般的には「賢い子」と呼ばれる傾向にあります。しかし、それが本当に賢いといえるのでしょうか？
「本当の賢さ」とは、それらの環境から様々な情報を読み取り、豊かに意味付けしていくことができることではないでしょうか？　椅子を単に椅子として覚えるだけでなく、乗り物に見立てたり、積み重ねてみたり、ならべてみたりなど、椅子以外の使い道を作り出していける力がある子どものほうが賢いと言えるのではないでしょうか？

そして、その**意味創造の過程（意味付けする活動）のことを「遊び」**と呼ぶのです。

人は様々な環境に出会い、環境とのかかわりを通して、その環境に対し、自分にとっての独自の意味付けをしながら、その環境を自分のなかに取り込んでいきます。つまり、多様な経験を重ねてこそ、自分の周りにある環境に対し、豊かな意味づけが可能になるのです。

経験の大切さを説明するなら、たとえば、幼児に「恋愛小説」は読めるでしょうか？
もしかしたら、幼児でもひらがな、漢字を学習していて、ただ声に出して読むだけならできるかもしれません。しかし、恋愛経験の無い子どもにとって、その恋愛小説に書かれている内容を深く理解し、主人公の気持ちに感情移入して心から楽しむことはできません。
同様に、実際に小さな頃から厳しい早期教育を施されながら育ち、暗記ものなど、学校での成績は優秀だったものの、感情が育っておらず、大人になってから苦しんでいる人も少なくないそうです。ですから、早期教育は意味がないのです。むしろ、正常な育ちを阻害することさえあるのです。

保育者の役割は、子どもたちにさまざまな環境に出合わせること。
子どもが出会った環境に対して、大人はそれが何であるのかを先回りして教えるのではなく、子ども自身が、そこからどんな情報を得ているのか？何を学んでいるのか？をよく見ることが大事なのです。そして、子ども自身が環境にかかわろうとする姿に必要な支援をしていくことが求められるのです。

子どもたちがさまざまな環境にかかわり、自分でその環境に意味付けしながら、自分のなかに取り込んでいく。そうした活動こそが、「子ども主体の学び」であり、「遊び」そのものなのです。